１１月号　　第２３１号
発行日　平成２２年１１月１日（月）
発行所　八王子の碁を楽しむ活きいき連合
住　所　八王子市初沢町 1227－4－A－522
ＴＥＬ　（０４２）６６３－９７５８
発行人・望月　成一
編集者・三浦　和夫

碁楽連の目的

碁楽連は、八王子市内に居住する高年者が、囲碁を通じて親睦を図り、かつ、健康を維持できるようにその機会を提供し、高年者の福祉の増進に寄与することを目的とする。

http://www.shiminkatudo-hachioji.jp/gorakuren/

歳はとっても強くなりたい

由木寿囲碁同好会会長　　杉渕　清

「碁は楽しく打ちたいものです」とは武宮九段の言葉だ。もちろんプロではそんな悠長なことは云っておれないだろう。我々アマチュアの碁への忠告である。碁楽連相談役の三浦さんも「アマチュアは碁を楽しむべし」と言われている。碁を楽しめるのはアマチュアの特権なのである。

よくいわれる一般的な碁の楽しみに加えて、我々碁楽連世代のアマチュアが碁を楽しいと感じるのはどんな時だろうか。高齢になってくると、自分は向上しており、捨てたもんじゃないと実感できる場面が少なくなってくる。そんな中で碁は努力次第では歳をとっても腕をあげられる。碁には実力を示す段級位という物差しがある。ここに我々にも棋力の向上を感得できるチャンスがあり、励みにもなる。

かつて碁楽連の研修部の例会風景を眺めて、強い印象を受けた。みんな真摯に碁に没頭している雰囲気が感じられた。毎週やっている地区同好会の例会でもみんな一生懸命で碁を楽しんでいるが、それとは違いがあるように思われた。腕を磨いてより上位を目指したいという向上心に微妙な差があるようだ。

このような差はどこから来るのであろうか。それは簡単に言えば、研修部での頑張りは点数制により、昇段･昇級に直接的に結びついていることだ。地区同好会からもいろいろ昇格のルートが準備されている。しかし活きいき大会以外は狭き門である。前者は努力による積み重ねを認める制度であり、後者は一発勝負によっている。実力に加えて運がよくないと昇格は難しい。

碁楽連の活性化の方策として、研修会方式を取り入れたらどうだろう。碁楽連の権威、運営の実務、公平性など検討すべき課題は多いだろうが一考の余地はあるか

もしれない。

段級位などどうでもよい、碁は打てるだけで楽しい、と思っている人はここでの提案とは無縁である。

第２１回　碁楽連囲碁大会（２段以下）のご案内

日時	平成２２年１２月５日（日）　受付午前９時～９時３０分
会場	東淺川保険福祉センター
主催	碁楽連
後援	日本棋院・八王子市・八王子市教育委員会
競技方法	４～５クラス別のハンデ戦　碁楽連方式
参加費	７００円
賞品	入賞者に賞品進呈
参加資格	２段以下の碁楽連会員で、地区寿同好会会長に申込みされた方 （申込受付は終了しました）

第２０回活きいき囲碁大会の結果

今年度の活きいき囲碁大会は１０月１７日の川口やまゆり大会を以って終了しました。

長房大会　（１０月３日）　於長房ふれあい館

参加者

長房	浅川	恩方	元八王子	中野	大和田	台町	北野	計
30	9	14	1	2	5	6	8	75

Ａ　組　２０名

優勝：小林　實　４段→５段/台町　準優勝：藤盛　茂　５段/長房　３位：笠原純吉　６段/恩方

Ｂ　組　１９名

優勝：斎藤　健　４段→５段/恩方　準優勝：望月成一　４段/浅川　３位：竹内朝晴　４段/恩方

Ｃ　組　１８名

優勝：小久保捷朗　初段→2 段/恩方　準優勝：細田正光　初段/大和田　３位：中岡誠　２段/北野

Ｄ　組　１８名

優勝：久保田勇　１級→初段/元八王子　準優勝：野口勝久　３級/長房　３位：山中茂　２級/大和田

川口やまゆり大会　（１０月１７日）　於川口市民センター

参加者

川口	恩方	元八王子	台町	北野	長房	石川	大和田	中野	淺川	計
１９	１９	５	３	６	８	１	１	３	１	６６

Ａ組　２２名

優勝：小池晴高　６段/恩方　　準優勝：徳満英世　５段/恩方　３位：竹内朝晴　４段/恩方

Ｂ組　２２名

優勝：池田清吾　４段→５段/恩方　準優勝：苫米地憲昭　４段/恩方　３位：望月毅士　３段/中野

Ｃ組　２２名

優勝：浜道　進　２段→３段/中野　準優勝：斉藤三男　１級/川口　３位：長谷川幸二　初段/恩方

活きいき囲碁大会参加者数の推移

年度	淺川	恩方	元八	中野	大和田	石川	台町	由木	北野	長房	川口	合計
18	61	60	45	45	48	44	38	47	58	53		499
19	60	78	51	48	43	45	50	42	64	49		530
20	66	75	56	49	69	49	73	47	63	53	48	648
21	65	74	63	57	61	58	73	40	65	50	59	665
22	68	83	74	47	53	42	52	45	42	75	66	647

第２１回地区団体対抗囲碁会の結果

平成２２年度第５回　１０月１０日開催

浅川　７勝	神宮寺敏郎７段	小黒　尚５段	草木昭臣４段
	吉永満雄３段	梶原和夫２段	西口正宏１級
石川　１１勝	戸野敦充５段	中村順二５段	水野義嗣５段
	二宮　学３段	本間邦夫初段	福島きみよ２級
大和田　７勝	秀島照次４段	岩松　清４段	大橋利行４段
	田口　勇２段	上野義臣初段	小川　勝２級
由木　１１勝	杉渕　清６段	長尾和美４段	奥山武平４段
	穂積宏易３段	中森久隆初段	滝本喜久治３級

台町　　８勝	高本　衛７段	吉田信夫６段	山崎修司４段
	古賀憲秀３段	建守貞彦初段	佐々木砂雄１級
長房　１０勝	市川隆一６段	安西　実５段	名取　進４段
	川合義章３段	石賀正嗣１級	中込義弘２級
川口　１２勝	松崎邦夫６段	山本数英５段	橋本岩雄４段
	矢島一雄３段	宮林國夫３段	東山　栄３級
北野　　６勝	柳井光夫５段	谷　　透４段	山本金昭４段
	河津秀雄４段	中岡　誠２段	堀岡　正初段

恩方対中野戦は都合により 10 月 24 日に変更になりました。

投 稿

加齢のため

長房寿囲碁同好会　池口　隆久

左足のふくらはぎと腿が内部から痛かった。満足に歩けない。病みつきになっていた高尾山健康登山も苦痛に耐える「行」でしかなかった。歩き始めの１５分間は大変な痛みを感じるけど、それを過ぎると何とか我慢できた。

我慢するばかりでも困ると、整形外科で検査・診察を受けた。「腰部背柱管狭窄症」という、あまり聞いたこともない病名を告げられた。自転車に乗っているとあまり痛くないが、歩行となると一歩ごとに激しく足が痛む。原因は歩きすぎかと思ったが、そればかりでもないらしい。主としては「加齢のため」と知った。背柱管の中を通っている神経の束が狭くなった部分で圧迫され、それが痛みの原因となっているらしい。

薬も、リハビリも、ブロック注射も利かない。こうなると、一生我慢して暮らすか、思いきって手術を受けるしかない。手術を前提とした検査を永生病院でうけた。造影剤を脊髄に注入しＭＲＡで撮影する。フィルムを見ながら説明をうけたがまず間違いはなさそうであった。念の為に、村山医療センターを紹介してもらい診察をうけたが同じことだった。「手術を受ける病院は自分が決めるのですよ」とかかりつけの主治医から聞いていたので、私は八王子の永生病院で受けることにした。診断も条件も同じなら、地元のほうが気分的には楽だった。

入院前に手術に必要な検査は済んでいたから、６月１０日入院、翌１１日に手術と順調にいき、次の日から車椅子でのリハビリが待っていた。入院の２１日間はおもしろい事件と経験の連続だった。８人部屋に７人が入っていたが、一人ひとりを

観察していると、何かストーリーが書けそうだった。病院の中は別世界と思えた。どの患者にも共通しているのは、自分の体の痛みにはこぞって心配をあらわにし、小心者になっていた。無理もない。

入院生活の毎日のくり返し（ルーティン）を紹介しよう。起床・洗面・食事の前のお茶・食事・薬飲み・歯磨き・トイレ・担当医の回診。看護士の巡回（体温計・血圧計）・清掃人の作業・リハビリ等であり、そのほかは水飲み、トイレ通い、横になって寝ていることが主な仕事だった。テレビを見ている人もいたが、私は詰め碁の本を１冊持ち込んでいたから結構退屈はしなかった。院内はエアコンが利いていたから、暑さしらずで良かったが、身体の筋肉はすっかり衰えてしまった。一日で筋肉が六分の一だめになるといわれたけど、本当かな。入院中私は主にわらじを履いていた。得意になって歩いていた。

リハビリの歩行訓練では、理学療法士に、腰が揺れていると指摘を受けた。自分では意識できないままに身体の筋肉が弱っていたのだろう。コルセットは３か月は絶対必要だった。削った腰椎の箇所は３か所、その箇所は時間がたてば丈夫になるが、その上下が弱くなるとのこと。安心はできない。かなり注意しないと思わぬ事故につながりかねない。

とにかく加齢のために、あちこち身体がいたんでいる。自分の身体は別だなんて思うまい。南アルプスの山々に登っていたのは４０年前の昔のこと。２０キロの弓を引いていたのは３０年前のこと。しかし、囲碁だけは、若い頃よりも腕前は確実に上がっている。これは嬉しいことである。入院中に詰め碁の本をくりかえし眺めていたが、初級用の本なのに、完全には習得できなかった。これは、例の毎日のルーティン（食事・歯磨き・薬・茶・回診・血圧・体温・部屋の患者の痰の音・リハビリ等）が介入してきて集中がとぎれるからだ。

退院はちょうど3週間の入院生活の最後の日にやって来た。退院は嬉しかったが、心の片隅ではちょっとつまらなく寂しくも感じていた。もう少し入院していてもいいかなとも思えたのも、担当医・看護士の手厚い手当てと親切とをありがたく感謝していたからかもしれなかった。

家に戻ってきたら自らの責任で、リハビリもこなし生活の諸活動もしなくてはならない。うっかりコルセットなしで、重いものを運んで、背骨に異常を来したりしたら、今までの苦労も水の泡である。高尾山はしばらくの間遠慮しよう。とにかく「加齢」というやつが大問題なのだ。気持の上では、加齢山と四つに組んで押し出しで堂々と勝ってやろうと意気ごんでいる。そうはいっても、そのうちに加齢を友達として仲良くつきあいながら人生を過ごす心境になる日がやって来るのではないかと思える。

ともかく、毎日一万歩は歩くこと、他のリハビリ運動も根気よく継続して行い体

力をつけることが最大関心事である。同時に、碁を従来通りに続けていき右脳と左脳・前頭葉の活性化に努めていきたい。

大事なことを言い忘れいた。それは手術の結果、左足の痛みがまったく消えたことである。今では、手術前の、あの痛みがまるでうそのように、そして遠い昔のできごとのように思い返される。ありがたいことである。感謝する心を忘れないようにしたい。

釧路の抹香鯨（旅と珍味、その３）

碁楽連理事　刀根　正樹

(一)

昭和３５年春、釧路にいた。私は入社２年目、まだ青くさい平社員だった。南氷洋からもどったばかりで､捕鯨部に所属していた｡各地に近海捕鯨の事業所があり、釧路にも港の東の砂浜に木造の基地があった。

春の道東は晴天が続き、暖かく素晴らしい季節である。岸壁に立てば、太平洋のかなたから力強いうねりが訪れる。ふりかえると、釧路大湿原がひろがり、原野に花が咲き乱れ､緑の地平線には､残雪をいただいた阿寒の山並が､私を招いていた。

鯨は夏までは、水揚げがなかった。私は事務所で暇をもてあまし、テレビばかり見ていた。作業員達は寮にこもって、マージャンにふけった。事務所には、定年に近い所長と、三人の女性事務員がいた。

夕方に私は、街に出た。当時の釧路は貧しい町で、粗末な木造の家並が続いていた。しかし、人々は元気で、いきいきとしていた。駅前に黒ずんだ建物の碁会所がある。私はそこを、毎晩のようにのぞいた。５級レベルの私には、なかなか相手が現れなかった。

或る日かっぷくのよい老人が、しげしげ私を見て、話しかけてきた｡「君は捕鯨の事務所に新しく来た社員か。先日あそこで見かけた」私がうなずくと、彼はうれしそうに笑った｡「わしもあの会社にずっとやっかいになった｡釧路で最期に数年つとめ、定年になった。住めば都とやら、この土地に骨をうずめることになった」平という姓で､平家の子孫だという｡長崎の五島列島で､代々漁業で生計をたててきた。「なあに、釧路の女に惚れて、一緒になったのさ。わしより三十も若い、アイヌ系の美女よ」

それから私は、この先輩に碁を教わったのである。田舎初段と自称したが、定石には詳しかった｡「船で勉強したのよ。しかし相手は誰も定石を知らんのだから、何の役にも立たんがのう」或る日、平氏は照れくさそうに私に命じた｡「鯨で忙しくなる前に、阿寒や摩周湖にピクニックをせんか。会社の女を誘ってみいや」

（二）

６月中旬、平氏の車で阿寒に向かった。黒い大型のシボレーだった。女性たち３人は、平氏のお誘いというと、喜んで応じた。在職中よく、一緒に旅をしたという。

紫にけむる釧路湿原を走り、深い森や白樺の山道を抜けると、青く輝く阿寒湖が展開した。向う岸には、富士に似た雄阿寒岳が優美にせり上がる。背後には雌阿寒岳が、巨大な火口を私にむけ、噴煙をはげしく情熱的に噴き上げていた。「ここで一服しようや。ウイスキーと例の干物がある」平氏はバックから、抹香鯨の干物を取り出した。筋が堅いが、塩コショウでほどよく調味され、鯨肉の味になじんでいる。抹香鯨は歯鯨で、ヒゲ鯨よりまずいと人気がない。東京大阪などでは全く流通していなかった。「今はこれで、子遣いをかせいでおる。釧路は水産都市で、けっこう客が多い」「奥さんは元気ですか」と年長の娘がたずねた。「おお元気だとも。今日は札幌に遊びに行っとる」

新緑にむせる阿寒横断道路を、東に向った。途中に展望台があり、海のように広大な原生林の中に、ペンケトーという小さな湖が見えた。「あそこはヒグマの巣だ。ハイカーが時々食われる」女性たちはあいかわらず、鯨の干物を食べていた。シャチのような、健康でよい体格をしている。「クジラパワーで、ヒグマを追い払いましょう」

鉄道の線路があった。釧路から網走まで、南北に通じている。地獄のタコ部屋の人々が、工事に奴隷のように使われた。それは太平洋戦争前まで存在したという。

弟子屈の駅から北西に向った。硫黄山という山全体から噴煙を噴出す、不動明王に似た火山があった。「硫化水素が流れている。まだ死にたくないから、ここは素通りしよう」

やがて川湯温泉に到着し、こじんまりとしたホテルに入った。一風呂浴び、平氏と碁を打った。私は三目置き、時折勝った。早打ちで数局打つうちに、女性たちに取り囲まれた。「ねえ、もう碁をやめて、飲みましょうよ。鯨はまだあるのでしょう」

夕食を早目に出すよう、ホテルに催促した。しかし皆鯨をたべたがった。平氏のバックから、それはいくらでも出て来るようであった。酔いがまわり、アイヌの歌が出た。もの悲しく、心に響く歌声であった。「彼女はアイヌ娘だ。君もここで身をかため、釧路に永住せんか。なんなら所長に頼んでもええ」そして年長の娘の肩を抱き、よい気分で一緒に歌っている。若いアイヌ娘が、私に身を寄せてくる。むっちりとした白い肌、黒くぬれた瞳、みればなかなかの美人ではある。「平さんは、長崎五島に本当の奥さんがいる。釧路の人は二号さんね。私はそんなの、ごめんよ」

翌日摩周湖に行った。群青の湖面に、神の山カムイヌプリが影を落し、薄い霧が流れている。「この神秘さがたまらん。湖の女神にわしは魅了され、釧路に腰を落ちつけたのじゃ」「うそおっしゃい。事務所のアイヌ美人に夢中で、つい手を出したく

せに」

(三)

７月下旬、鯨が揚った。キャッチャーボートが、沖から１０ｍほどの抹香鯨を曳いて来た。ウインチがけたたましく鳴り、大庖丁をかかえた作業員が鯨に殺到し、手際よく解体する。肉塊がひきずりまわされ、血汐がとび散る。一週間もすると、鯨の頭数がたちまち増えてきた。夜遅くまで作業が続き、徹夜になることもしばしばあった。

ふと気がつくと、平氏が作業員の間をうろつき、鯨肉を物色していた。背がしゃんとのび、足どりも活発で、目が鋭く輝いていた。多少鮮度の落ちた肉を、安く買いたたいて仕入れるのである。

数日間の大漁が続いた。私は体がもたなかった。休憩室の畳の上に、３０分ほど横になった。誰かが来たような気配がした。うす目をあけて見ると、アイヌ娘がぬれ手拭を持ち、私のかたわらに坐り、顔や手足についた鯨の血を拭き取っていた。私はいいしれぬ快さ、幸福感を味わった。夫人を捨て、釧路に永住した平氏の気持が、よくわかったのである。

その一月後、私はまた南氷洋に出漁した。そして以後ずっと釧路を訪れたことはなかった。今にして思えば、八王子であくせく働く現在の生活に比べ、雄大な釧路の大自然に溶け込み、アイヌ娘の愛に包まれて生き抜いた平氏を、見事だと感動する。そして私の碁の中には、平氏の生命が今も鼓動しているのを感じるのである。

◎ 碁楽連理事が代わりました

９月３０日を以って**真辺理事**（恩方）が退任され、新たに１０月１日より**長谷川幸二氏**（恩方）が理事に就任しました。よろしくお願いします。

◎第６回　碁楽連理事会

日時　　平成２２年９月２５日（土）９：００～１２：００

出席者　理事５名（塚原理事欠席）、端山昌夫氏

議案　　１：第６０回市民文化祭囲碁大会の準備について

２：碁楽連囲碁大会の準備について

３：各大会の賞状仕様内容について

編集後記　活きいき囲碁大会は全日程を終了しました。ご協力有難うございました。残るは地区団体対抗囲碁会の１戦と碁楽連囲碁大会（3 段以上、２段以下)、碁楽連タイトル囲碁大会の３大会です。皆さんのご健闘を期待します、またご協力をお願いします。